

魅惑の国ヨルダン

早瀬雅博

1. ヨルダン概要

- (1) 正式国名 ヨルダン・ハシミテ王国
- (2) 元首 アブドゥラー国王
- (3) 公用語 アラビア語
- (4) 首都 アンマン
- (5) 面積 8.9 万平方キロメートル（日本の約 4 分の 1）
- (6) 人口 604.7 万人（2010 年世銀）
- (7) GNI 262.7 億米ドル（2010 年世銀）
- (8) 独立 1946 年 トランス・ヨルダン王国として独立
- (9) 政体 立憲君主制
- (10) 宗教 イスラム教 93%、キリスト教他 7%
- (11) 民族 パレスチナ人（60%）、アラブ人
- (12) 通貨 ジョルダン・ディナール
- (13) 時差 - 7 時間 サマータイム期間（4 月～10 月） - 6 時間
- (14) 歴史



- ・約 50 万年前の石器時代からヨルダン川流域に遊牧民がいたらしい。
- ・紀元前 1 万年前にはヨルダン川渓谷で人類最古の農業が行われていた。
- ・紀元前 1,000 年頃には数々の王国があった。
- ・紀元前 4 世紀にはナバタイ人がヨルダン南部のペトラに王国を築いた。
- ・紀元前 2 世紀には南下して来たローマ軍によって滅ぼされた。
- ・ローマ帝国が 3～4 世紀に亘ってヨルダン地域を支配した。
- ・その後、ビサンティン帝国が台頭し、400 年間キリスト教支配となる。
- ・7 世紀にイスラム教が出現し、南アラブからイスラム軍が侵入。
- ・それ以降、ヨルダンはイスラム教の国となる。
- ・11 世紀末に西ヨーロッパの十字軍の侵入が始まった。
- ・16 世紀にオスマントルコが大帝国を形成し、シリア、ヨルダン、パレスチナがその一部に組み込まれた。
- ・第一次大戦後の 1918 年、英国と仏国で交わされた秘密協定でシリアは仏国保護領、ヨルダンは英国保護領となった。
- ・1946 年、イギリスから独立し、ヨルダン・ハシミテ王国となった。
- ・1953 年、フセインが 18 歳の若さで国王になった。
- ・1999 年、アブドゥラーが国王になった。（地球の歩き方より抜粋）

(15) 経済

近年は平均で 7%を超える高い成長率であったが、2008 年の世界的金融危機の影響を受け、最近の経済成長は伸び悩んでいる。

都市・地方間の所得格差、高い水準で推移する貧困率や失業率、慢性的な財政難などの問題を抱えており、資金援助、短期的な資本流入、地域の治安維持などに外国からの援助が必要とされている。

2. ヨルダンへ行く決意

未知の国ヨルダン。JICA の募集要領に国名ヨルダン、指導科目労働衛生とあった。内容を読むと工場の労働安全衛生である事が分かった。これならやれる。しかし、ヨルダン川西岸地区でイスラエルとパレスチナ人の紛争が激しさを増し、又中東各地でイスラム原理主義者が暴れまわっている時期であったので、ヨルダン情勢について、JICA に電話で問合せをした。「ヨルダンについては良く分からないが問題があれば、出発を延期するとか中止するとかの対応をするので、とりあえず応募してみたらどうか？」とのアドバイスを受けて応募し合格。ヨルダンは大丈夫であろうという事で行く事にした。

3. いざヨルダンへ

日本からヨルダンへは直行便がない。現在ではUAEのドバイ経由が一番早いですが、私たちが出発した 2002 年当時はイギリス、フランス、ドイツ、オーストリア等のヨーロッパ経由で行っていた。当時フランスのシャルル・ドゴール空港では荷物が紛失する事が多かったので、私たちはドイツのフランクフルト経由で 2 日ばかりでヨルダンに入った。

4. ヨルダンってどんな国？

- ・中東の比較的安定した国
- ・イスラム社会の国
- ・非産油国
- ・水資源が世界で二番目に少ない国
- ・教育水準が比較的高い国
- ・パレスチナ難民の多い国
- ・貧富の差が大きい国
- ・土地の 80%が荒野と砂漠

5. ヨルダンの人々

- ・ 信仰心が厚い
 - ・ 男性中心の社会
 - ・ 男女別々にグループ化
 - ・ プライドが高い
 - ・ 家族を大切にする
 - ・ 血縁、同族の結束が固い
 - ・ 多くの男性は髭を生やしている
- ・ 挨拶はお互いにホッペにキス



ハイキング途中の列車の中

6. ヨルダンの気候

- ・ 四季 四季あり、但し春秋が短い
- ・ 雨季 11月～ 3月
- ・ 乾季 4月～10月
- ・ 気温 0 ～ 50 ℃ (地域によってかなり異なる)
- ・ 湿度 低湿度
- ・ 雪 殆ど積雪は無い (2003年1月に大雪)

7. ヨルダンの家

- ・ 石造り
- ・ 部屋が大きい
- ・ 水タンクを備えている
- ・ セントラルヒーティング設備を備えている
- ・ 冷房装置を備えた家は比較的少ない



8. ヨルダン国王夫妻

ヨルダンではタイと同様アブドラ国王夫妻が国民に信頼され、圧倒的な人気がある。国王は米国や英国の大学や士官学校で勉強された事もあり、親英米派である。

前国王のフセイン国王時代から日本の皇室とも親しい間柄であり、時々相互訪問をされている。

国王はヘリコプターを自分で操縦したり、単車を取り回したり、トレッキングをしたりされる活発な方で、ヨルダンの観光にも一役買われている。



王妃はパレスチナ人であり、難民の救援活動に力を入れておられ、イスラエルに於けるパレスチナ人への攻撃に対し、抗議行動デモに参加されたりしている。

9. 自然と生活

緑豊かなタイで2年間、過ごしたので空港から市街地へ入るまでの道中、緑が非常に少ないなと感じた。市街地に入るとホテルや大邸宅には立派な木が茂っていたが、町全体ではやはり緑が少ない。ヨルダンは水資源が世界で2番目に少ない所なので、植木を持っている家は植木にやる水を買っていた。

石作り3回建ての家の2階を借りて住むことにした。入居直後に家内がシーツやカーテンなどを3、4回洗濯したら、水が出なくなって困った。ヨルダンは水が少ないので、土曜から日曜にかけての24時間しか各家庭に給水されないという事が後で分かった。給水されている間に地下タンクに水を入れて、その水を各家専用の屋上タンクに入れ、これを一週間使用する。私たち日本人はお風呂に入りたいので、お風呂に入るがバスタブに20～30センチ程の水を入れ、仰向けになったりうつ伏せになったりして済ませていた。仲間同士ではこのお風呂に入り方を「天ぷら」と呼んでいた。

4月から10月の乾季は真っ青の綺麗な空で雲一つなく、雨は一滴も降らない。気温は地域によってかなり異なる。首都アンマンは高地にあるので、夏でもあまり高温にならず、湿度が低いのであまり暑いとは感じない。アンマンの事を仲間同士では“ヨルダンの軽井沢”と呼んでいた。気候が良いので国内外の富裕層がアンマンに別荘を建てたり、移り住んで来たりしていた。

しかし、海拔マイナス約420mと世界で最も低い地域である死海の夏は非常に暑い。湿度も高いので息苦しいくらいである。気温は摂氏50度位になる。

10. イスラム教

イスラム教は7世紀の始めに、メッカの名門の出身であるムハンマド（マホメット）によって開かれた。ムハンマドはアッラーの神の声を聞く事の出来る預言者として「アッラーが只1人の神であり、宇宙の創造主である。」というイスラム教の教えを広めた。しかし、その頃アラビアの人々は多神教を信じていたので、ムハンマドは迫害を受け、西暦622年に少数の信者を連れてメディナへ移住した。この移住をヘジラ（聖遷）とよび、イスラム教では、この年を紀元元年としている。

ムハンマド達がメディナへ移住してから10年余りの間に、アラビア人の殆どがイスラム教を信じるようになり、又各地に広がり現在では世界中に12億とも16億とも言われるイスラム教信者がいる。世界の約4分の1の人がイス

ラム教徒である。

ヨルダンには至る所にモスクがあり、お祈りの時間が来るとモスクの塔から時間を告げる“アザーン”が聞こえてくる。場所によっては、3，4か所から聞こえてくる。夜明け前、お昼、3時頃、夕方、就寝前の5回である。“アザーン”が聞こえたら、信者の皆さんが手足を清め、お祈りを始める。始め、うるさいと感じていた“アザーン”もその中、演歌のようにも聞こえ好きになって来た。

イスラム教の教えの一つにラマダン（断食）がある。貧しい人たちの事を思い、同じ立場に立って断食をするのであるが、暑い時期にラマダン月が来ると大変。日中は食事のみならず、水も飲んではいけない。信仰心の強い人は唾も飲み込まないと言われている。酒屋は全部店を閉める。しかし、裏もあり、店の扉が少し開けてあり、そこから入り、ビールやウィスキーを買う事が出来る。



キングフセインモスク

商品は何か分からないように黒いビニール袋に入れてくれる。ラマダン中でも日没後は食事を採っても良い。家族や同族の人たちが集まって夜遅くまで食べている。食料品の売り上げは普段の月の2倍にもなるそうである。

11. 人間関係

金曜日のモスクでの礼拝の後、ヨルダンの人たちは、良く親兄弟の所に集まって話をする。時には一族が集まって大きなパーティーをやる。仕事の後、同僚が集まって一杯、なんて事は一切ない。職場で何かやるとしても、食堂の食堂に皆が集まって、食事をする程度である。食堂と言ってもお湯が沸かせる程度の設備があるだけで、毎日昼食が出る訳ではない。

従って、どこかの一族に入れてもらわない限り、親しい人間関係は築けない。幸いにも私たちはヨルダンでもハイソサエティーの一族で、2つの会社の社長をしているMさんと親しくなる事が出来た。彼の家のホームパーティーや音楽会などへしばしば招待された。このパーティーには多くの人たちが集まって来て、その人たちとも知り合いになった。

郊外の彼の別荘にも招待された。彼は広大なオリーブ畑を持っており、監視を兼ねて時々この別荘へ来ているようであった。王室関係者の顧問をされている彼の弟の家へも連れて行って貰った。ここから見た満点の星空は素晴らしく、今でも脳裏に焼き付いている。

Mさんを家に招待しお寿司その他の日本食で歓待したが、食事後彼曰く「ミ

セスハヤセ、日本食は誠に美味しかった。しかし、一つだけ気に入らないものがあつた」と。家内と私は顔を見合わせた。「オリーブ油が美味しくなかつた」との事。普段私たちはオリーブ油が美味しいとか不味いとか考えた事が無かつた。あまり古いオリーブ油を使ったわけも無かつたのに、さすがオリーブ油に詳しい人は違うなと思つた。翌日、彼から1ダースの新鮮なオリーブ油が届いたのには恐れ入つた。

12. 風習

(1) 男女7歳にして席を同じゅうせず

ヨルダンでは若いカップルが手を繋いで町を歩くという事はしない。男同士、女同士ではある。女の方は男に性的刺激を与えぬよう、外出時には髪の毛をヒシャブ(スカーフ)で覆う。真夏の暑い時でも厚地のオーバーのようなだぶだぶの服を着る女性が多い。下には何も付けていないという話もあるが、真偽のほどは確かではない。女性の体の線を見せないためと暑い直射日光を避けるためと思われる。湿度が低いので、あまり暑くないそうだ。

バスの中でも女性の座っている横に男性は座ってはいけない事になっている。昔の日本の「男女7歳にして席を同じゅうせず」と同じ? それでも大学のキャンパス内は治外法権らしい。手を繋いでベンチに腰を下ろし、楽しそうに話しこんでいるカップルを見かける。女性の大学進学の目的の一つが結婚相手を探す事であるが、自由恋愛も大きな魅力の一つらしい。

(2) 浮気は決死の覚悟

浮気は決死の覚悟がいる。もしばれたら、相手の女性の夫から殺されても仕方がない。イスラムの法典“コーラン”には「姦淫してはならない」と書かれている。コーランの教えに背いた男はイスラム法では人前で100叩きの刑に処せられる事になっているが、被害者の夫から殺されても仕方がないという事になっている。殺した夫は“名誉殺人”という事で、短期間、投獄されるがすぐに釈放されるそうである。妻である女性もどのような仕打ちをされても弁解の余地は無いそうである。ばれたら怖いので、浮気した者同士は絶対に口を割らないそうだ。でもフライデーされたら……。

(3) 泥棒もダメ!

ある日、仲間之家に泥棒が入つた。気丈な奥さんが捕まえて、警察に通報しようとしたら半狂乱になり「警察に通報しないでくれ」と叫んだそうである。コーランで人のものを盗んではいけないと書かれているので、これも大きな罪になる。右手首をちょん切られても仕方がない事になってい

るそうである。

13. 普段の食生活

93%の人がイスラム教徒であるため、豚肉は御法度。アルコール類もダメな筈なのに何故かスーパーでも売っているし、酒屋さんもある。ビール、ワイン、ウィスキー、探せば日本酒も手に入る。

主食はパンと米。パンは大別すると、ホブスと呼ばれる平べったいインドのナンに似たパンとコッペパンの2種類である。米もカリフォルニア米や中国米が手に入り、不味くはない。

肉類は山羊、羊、鶏、牛が一般的である。牛肉は日本の牛肉のように柔らかくない。又、薄切り肉が無いので、すき焼やシャブシャブが食べたいとなると、仲間が集まって肉の準備から始める。塊の肉を買って来て5時間冷凍庫に入れる。(この5時間が重要なポイントである。)5時間後にハム用のスライサーでスライスすると丁度良い薄切り肉となる。この肉ですき焼やシャブシャブを作り、皆で食べた味は今でも忘れられない。

町では沢山の鶏肉を丸ごと焼くロースターで焼き、売っている。野菜が少しついて2,5JD(当時の為替で日本円375円)。

魚はアカバ湾で取れる魚と輸入品は入る。冷凍技術が良くないので、店頭で売られている魚はあまり食べる気がしない。魚屋に頼んで置くと新鮮な魚が入った時に連絡してくれるが、よく確かめて買わないと古い魚を買わされる。アカバ湾で採れるハムールという魚は身が締っていて、日本の鯛より大きくて美味しい。仲間の誰かがアカバへ行く時には、この魚を買って帰り、皆で捌いて刺身、煮魚、焼魚、赤出し等にして食べる。出刃包丁が無いので大変。頭を落とす時に指を痛める事がある。



鶏の回転焼き



シュワルマ

14. 珍しい食べ物

娘たちが遊びに来たある日の事、私のカウンターパートが私たち家族、JICAの事務所長夫妻と調整員を食事に招待してくれた。彼の家では無く、郊外にある静かな彼の兄弟の家であった。

夕食時になっても、彼の奥さんは食事の用意をしないで子供たちと遊んでいる。私は心配になって「食事はケータリング？」と聞いた。「否」と言う返事。しばらくして「夕食は？」「もう少し待て」。しばらくして、又同じ質問。

イライラし始めた頃、「もうぼちぼち出来たかな！？」と彼が言った。「エ〜？」出来上がったのはこれ！！ 写真を見て下さい。ザルブと言う料理。



15. エピソード

(1) 一時避難帰国

アメリカによるイラク攻撃が開始されそうになった2003年2月、JICA事務所が何組かに分けて邦人の一時避難帰国を開始した。もし、イラク攻撃が始まれば、親米国のイスラエルが参戦し、イスラエルとイラン間で弾道弾が飛び交うかも知れない。そうなればイスラエルとイランの間にあるヨルダン是非常に危険な状態になり、その時に帰国しようとしても帰国出来ない状態になるとのJICAの判断であった。約2ヶ月の避難帰国後、再びヨルダンへ戻り、それぞれの任務に就いた。

しかし、その後もイスラム原理主義者の自爆テロなどが有り、全く安全という状態には戻らなかった。大使館員、JICA関係者全員に犠牲者が出なかった事は幸いであった。

(2) 結婚式



披露宴に招待されて、2度参加した。ハイソサエティーの家の息子さんなので立派な披露宴であった。イスラムの結婚式に興味があったので見たかったが、結婚式には参加させて貰えなかった。一度目はホテルで、2度目はレストランで披露宴が行われた。

16. 旅の思い出

ペトラ遺跡

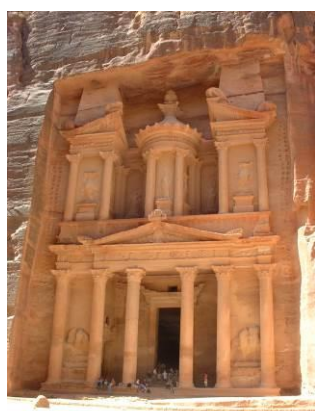
ペトラは2000年以上も前からアラビア半島からやって来た遊牧人のナバタイ人やベドウィンによって栄えた町である。

シークと呼ばれる狭い岩の裂け目を30分程歩いて行くと突然、視界が広がり、エル・ハズネと呼ばれる宝物殿が出現する。紀元前1世紀から後2世紀頃に、崖を削って作られた霊廟であり、映画

「インディジョーンズ/最後の聖戦」の舞台ともなった。広いペトラ遺跡内をラクダに揺られながら、あちこちを見て回りレストランのある所まで行きそこで食事をして、更に高所へ登って行った。一番高い所にエド・ディルと呼ばれる修道院跡があった。これも崖を削って作られている。



シーク



エル・ハズネ



エド・ディル

17. JICAの活動

(1) 日本式労働安全衛生の指導

ヨルダンの労働省傘下である職業訓練公社の職業安全衛生学院に配属された。首都アンマンから車で約30分の所にあるマルカという地区に学校があり、そこで、先生方に日本式の労働安全衛生手法を教育した。

ヨルダンでは一定規模以上の企業には労働安全衛生管理者、産業医、看護婦を置かねばならないという法律があり、企業規模に応じてその人数も定められている。従って国は労働安全衛生技術者の教育が義務付けられている。

職業安全衛生学院では1週間から1年位の様々なプログラムが用意され、教育を行っている。万力、帯鋸、ガス溶断器などの簡単な機器、騒音測定装置などの測定器の他に原子吸光装置や分光分析装置などの精密機器も設置されていたが、精密機器は人材不足、メンテ不足、薬品不足などの理由でまったく使

用されなくなっていた。

教授陣に日本式労働安全衛生を指導すると共に、労働省の役人、カウンターパート、私の3人で週一回、各企業へ行き、労働安全衛生のチェック、指導をしに出かけたり、企業の安全衛生担当者を集めて、企業訪問をしたりした。不安全行為や不安全状態の多い企業があったので、カウンターパートと共に企業指導に行こうとしたが、指導に行く場合、企業から指導料を取らなければならないシステムになっていたため、企業側が指導料を出すのを嫌がった。私一人で企業指導することにし、無料で3企業を指導した。そのうちの1社が大きな成果を上げた。企業を回ってみて、トップからボトムまで安全衛生意識が非常に低いことが分かったので、年1回安全衛生週間を行う事を提案し実施した。

(2) 労働安全衛生週間

カウンターパートや学院長に労働安全衛生週間の事を説明し、実施するよう提案したが、なかなかOKが出して貰えず一時は諦めたが、帰国までに後半年という頃にやっと許可が出、労働省、保健省、社会保障公社、経営者団体、マスコミ、労働組合等を巻き込み、国全体で実施する事になった。労働安全週間用のロゴやポスターの作成、式典やポスターコンテストの会場探しなど、初めは一人でやっていたが、予算と私の任期延長問題に目途がついたので、一気に進める事が可能となった。労働副大臣を推進委員長にし、新聞、ラジオ、テレビ、携帯電話で全国民に宣伝した。新聞やラジオは何回もキャンペーンを繰り返してくれた。

ロゴ、ポスター、横断幕、宣伝用のTシャツや帽子を用意し、週間の初日には盛大な式典を行い、在ヨルダン日本大使やJICAの所長にも祝辞を述べてもらった。7か所での講演会、ポスター展、資料や保護具の展示会などを行い、大きな成果を上げた。ヨルダンのみならず、中東では初めての事であったので、近隣諸国からも多くの関係者が参加した。本年7月にも第10回労働安全週間が実施される予定であり、私が撒いた種が大きく育ったと今でも満足感を味わっている。

以上

